

音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオと ラーニング・ポートフォリオの開発

中村 仁

Development of Teaching and Learning Portfolios in the Department of Music

Hitoshi NAKAMURA

Abstracts

This paper describes the development of teaching and learning portfolios in the department of music and their potential for improving education and evaluating educational performance in the future. In addition to the conventional guidelines for creating teaching portfolios, we proposed that the teaching portfolios be accompanied by a record of the teacher's performance activities, a description of the results of the student's practical skills lessons, and evidence of the student's performance as a performer (performance activities = educational activities). In creating the learning portfolio, we proposed that it should be possible to support the learning of specialized music subjects by dividing it into six steps, summarizing the subjects taken in a reflective manner, and also by including the music scores and programs used in the lessons as evidence.

Keywords: Teaching Portfolios, Learning Portfolios, Department of Music, Reflective Practice

1. はじめに

本稿では、教員の教育業績記録として注目されているティーチング・ポートフォリオと、学生の学習実践記録として知られるラーニング・ポートフォリオに着目し、音楽学部における作成方法と分析を通じて導入検討を行う。

ティーチング・ポートフォリオについては、大学設置基準の一部改訂に伴い、2008年より義務化されたファカルティ・ディベロップメント（以下、FDと略記）の実施により、その重要性が注目されてきた。一方、ティーチング・ポートフォリオの作成を全学的に促している大学は僅少であり、さらに大学ごとによって内容や質等異なっていることが現状として挙げられる。また、ラーニング・ポートフォリオにかんして、紙媒体で導入している大学は皆無に等しく、現在はデジタル化されたeポートフォリオを活用している大学がほとんどである。筆者が所属する活水女子大学においても「活水くすのきポータル」を使用しており、出欠確認やレポート提出、学習記録・自己評価を入力することが可能である。しかしながら、音楽学部生のアンケート¹⁾によると「活水くすのきポータル」を十分に活用できていると回答した学生は僅か17%であり、ほとんどの学生が十分に活用できていないという実態が明らかとなった。

そこで本稿では、紙媒体のポートフォリオを作成し、加えて音楽学部にて特化した項目を取り入れたティーチング・ポートフォリオおよびラーニング・ポートフォリオを作成し、教員の授業改善および学生の学習改善を目的とする。

2. 音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオの開発

2.1 ティーチング・ポートフォリオとは

ティーチング・ポートフォリオとは、教員の教育業績記録をまとめたものであり、その記述を 8～10 ページほどの本文と、本文の主張を裏づける根拠資料で構成された文書のことを指す。セルディン（2007）はティーチング・ポートフォリオの作成にあたって以下のことが重要であると論じている。

重要なのは、ティーチング・ポートフォリオとは個人の教育業績に関連する全ての文書や資料の網羅的な寄せ集めではなく、教育活動に関して十分に考えて選ばれた情報と、教育活動の有効性に関する確かな根拠資料を提示するものだけということである。（中略）効果的なポートフォリオを作成するには、慎重な資料の選択とよく考えられた構成が必要である。それは、読み手を納得させられるように正確かつ包括的に教育の有効性を描き出すものでなければならないのである。²⁾

日本国内では、杉本（1997）が初めてティーチング・ポートフォリオにかんする論文を発表して以降、弘前大学を中心としたティーチング・ポートフォリオの積極的な導入に向けた活動が行われた。とりわけ土持（2009b）はティーチング・ポートフォリオについて「教員の授業実践サンプルに「省察」を促し、授業改善の「診断書」となる」と述べており、ティーチング・ポートフォリオが授業改善に必要不可欠であることを論じた。

現在では栗田・吉田（2021）によるティーチング・ポートフォリオ・チャートおよびティーチング・ステートメントを活用した FD も行われており、直近では北海道科学大学や横浜商科大学、活水女子大学などで開催された。通常ティーチング・ポートフォリオ作成 FD は 2 泊 3 日³⁾で行われるが、ティーチング・ポートフォリオ・チャートもしくはティーチング・ステートメント作成のみの FD の場合、1 日で修了することが可能である。栗田（2020）は、ティーチング・ポートフォリオの本文中「責任、理念、方針・方法、改善、評価・成果、目標、という構造」が「教育活動に対して一貫性を持った枠組を与える」とし、FD を通じてティーチング・ポートフォリオ・チャートを活用した本文の作成を促している。また、ティーチング・ポートフォリオ・チャートは木内（2021）による大学体育への適用など、実技科目の教育活動を生きた研究の場として位置づけすることが可能であることを証明したことにより、他分野における活用も期待されるようになった。

なお、ティーチング・ポートフォリオの作成は教育改善に繋がるだけでなく、教員の人事・採用にあたっての教育業績としても用いることができる。例として、全学的にティーチング・ポートフォリオの作成に取り組んでいる佐賀大学では、教員選考時の提出書類にティーチング・ポートフォリオの提出を求めていることが挙げられる。皆本（2016）によると、佐賀大学の教員選考時におけるティーチング・ポートフォリオの評価にはルーブリックを用いていると言及しており、また、ティーチング・ポートフォリオを提出することにより「教育者としての能力が根拠資料に基づいて評価できるため、より公平な教育業績評価が期待できる」としている。

以上のことを踏まえ、次に従来のティーチング・ポートフォリオの作成方法と音楽学部教員に特化した項目の提案を行う。

2.2 ティーチング・ポートフォリオの作成方法

セルディン（2007）によるティーチング・ポートフォリオの作成のステップは以下のとおりである。

1) 計画を立てる

ポートフォリオを作成する主な目的を明確にする。

- 2) 教育面での責任を要約する
主として担当科目、必修・選択、対象学年の3パラグラフの説明が記される。
- 3) 自分の教育アプローチを説明する
教育の責任をどのように果たしているのかを説明する。
- 4) ポートフォリオに取り込む項目を選ぶ
教育の責任と教育アプローチに最も適した項目群を選択する。
- 5) 各項目に関して記述する
各項目の教育方法などに関する活動や率先的行動および成果について記述する。
- 6) 各項目を順序よく配置する
ポートフォリオの使用目的に合わせ、それぞれの分野での成果に関する記述を順序よく配置する。
- 7) 裏づけデータをまとめる
ポートフォリオで言及された全ての項目について、それを裏づける根拠資料を準備する。
- 8) ポートフォリオをファイルに綴じる
3センチ程度の厚みのある2リングバインダー1冊に綴じる。

上記に加え、セルディンは異なる専門分野の内容や構成にも対応できるよう、「自ら作成するもの」「他者から提供されるもの」「教育／学習の成果を示すもの」と3つの大まかなカテゴリーに分け、安定して組み込まれる項目例を挙げた。

これを受け、本節では音楽学部教員が作成するティーチング・ポートフォリオ作成方法を考案する。音楽学部には所属する教員のほとんどは現役演奏家であり、自身の演奏活動が教育に還元している場合が多いため、今回は従来のティーチング・ポートフォリオ内容に加え、以下のように作成手順を考案した。

- 1) 自ら作成するもの
レッスンで使用した練習曲やその記録簿、自身の演奏活動記録
- 2) 他者から提供されるもの
リサイタルやコンサート等の評論、音楽賞等の表彰、レッスンを参観した教員からの講評
- 3) 教育／学習の成果を示すもの
授業内での成果発表会の実施、演奏会・コンクール等の参加、卒業後の進路と演奏活動

1) については、個人レッスンを想定している。レッスン中に使用したオリジナルの練習曲やその方法をまとめたレジュメや冊子等が該当する。加えて、レッスン記録簿を教員が作成することにより、当該学生の学習の習慣化および技術向上の手がかりを証明することが可能であると考えられる。また前述どおり、音楽学部教員は現役の演奏家であることがほとんどであるため、学外での演奏活動等を通じて教育および研究に貢献している事項も記述しておくことが重要であると考えられる。

2) については、学内外における教員の音楽技術および教育評価を証明するものである。演奏することも教育活動の一環である音楽学部教員は、自身のリサイタルやコンサート等の評論および記録を本文中に執筆することが求められる。また、東京藝術大学が教員受賞者にかんする情報を公表⁴⁾しているように、学外からの評価として音楽賞等にかんする記述をすることが望ましい。とりわけ実技科目の場合、学生が習いたくなるような教員であることが求められるため、このように他者からの評価を記述することが重要である。

3) については、例として学期末の成果発表会実施などが挙げられる。演奏会を教育の成果として挙げることで、学生の評価をするだけでなく、自身の教育理念を見直すことが可能となる。また、演

奏会やコンクール等の参加、卒業後の進路と音楽活動を学習の成果として挙げることは、音楽学部の特色ある取り組みの方針と根拠を記述するうえで非常に重要である。

以上、音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオの作成方法について論じた。次章では、まずラーニング・ポートフォリオについて概観した後、音楽学部におけるラーニング・ポートフォリオ作成について方法および分析を通じて考察する。

3. 音楽学部におけるラーニング・ポートフォリオの開発

3.1 ラーニング・ポートフォリオとは

ラーニング・ポートフォリオとは、学生の学習実践記録をまとめたものを指す。大学におけるラーニング・ポートフォリオでは、記録をもとに作成した本文と根拠資料から、どのようなことを学習したのか省察し、大学での学習および将来の目標へ繋いでいくことが期待される。元々ラーニング・ポートフォリオは小中高等学校において積極的に導入されていたが⁵⁾、セルディンによるティーチング・ポートフォリオ作成の手引きが高等教育機関に浸透して以降、ラーニング・ポートフォリオも注目されるようになった。

土持(2008)はラーニング・ポートフォリオについて、論述試験(ペーパーテスト)やレポートとは別であるとし、「能動的学習の促進という視点から、学生自らが学習プロセスを省察したラーニング・ポートフォリオの意義は重要である」と考え、日本の大学における導入を積極的に提案した。また、中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008)において「学習ポートフォリオ⁶⁾」と称し、活用の重要性について言及した。以降、北海道大学でのFDをはじめ、弘前大学におけるラーニング・ポートフォリオの導入および佐賀大学におけるデジタル版ラーニング・ポートフォリオ(eポートフォリオ)など、学習改善に繋げる試みが多く行われるようになった。

以上のように、大学におけるラーニング・ポートフォリオの活用と実践は行われているものの、音楽学部などの専門科目が設置されている大学における導入は著しく遅れを取っている。近年では山口(2021)が音楽実践演習においてeポートフォリオを活用した研究例が報告されているものの、内容としては音楽教育(教員養成)に限定されており、音楽学部開設科目である実技および音楽史等の座学を扱ったラーニング・ポートフォリオの実践例は報告されていない。そのため、本節では音楽学部におけるラーニング・ポートフォリオの作成とその分析を通じて、導入の可能性について考察する。

3.2 ラーニング・ポートフォリオの作成方法

筆者が担当している授業科目「音楽基礎講座」(音楽学部1年生対象・必修科目)にてラーニング・ポートフォリオ作成を行った。筆者の考案したラーニング・ポートフォリオ作成手順は以下のとおりである。

- 1) 学習計画
音楽学部に入学しようとした動機と卒業時に身に付けたいことについてまとめる。
- 2) 学習内容の把握
学部1年次に履修する科目の概要と到達目標を把握する。
- 3) 記録
音楽学部開設科目のうち、履修したものを記録する。
- 4) 本文の作成
記録をもとに文章化し、自己評価をする。
- 5) 自己評価の根拠

最後にラーニング・ポートフォリオ本文で述べた自己評価の根拠資料をまとめる。

6) ファイリング

ファイルにまとめ、ラーニング・ポートフォリオを完成させる。

1) および 2) は初回の授業時にシラバス等で確認を行い、さらにオンデマンド型授業にて作成のサポートを行った⁷⁾。1) は夏季休業中の課題とし、学期末にフィードバックができるよう入学の動機を詳細に述べるよう指導した。また、卒業時に身に付けたいことが特に見つからない場合もその旨記述するよう指導した。なお文章量は4、5行を目安とし、作成時間を15分に設定した。2) はラーニング・ポートフォリオ提出前に文書化することを課題とし、音楽専門科目（教職課程を除く）に限定して記入するよう促した。シラバス等を参考とし、文章量は8、9行を目安とする。1年次に履修した科目をまとめ、省察的記述をしなければならないため、作成時間を2時間に設定した。

3) は授業ごとに取るノートやリアクションペーパー等が当てはまる。なお実技科目の場合、レッスン記録簿およびレッスンの録音データ（但し担当教員の許可を取らなければならない）を代替とする。この工程において重要なことは、授業内容を単にまとめるだけでなく、学生自身がその授業を通じて何を学び考えたのかについてメモを取ることを身に付けさせることである。

4) では、3) の記録をもとに本文を学期末に作成する。今回の作成では1科目5、6行程度を目安とし、2) と同様、省察的記述をしなければならない。

5) の根拠資料として、3) で記録したものを添付する。ただし、自己評価を必ず記述していることが前提であり、レジュメなどの授業内容を記録したものは根拠資料として認められない。そのため、授業内でのリアクションペーパーや小レポート、実技科目の場合は公演プログラム⁸⁾ やレッスン内容を書き込んだ楽譜を添えることが推奨される。最後に6) を以て完成となる。

なお、ラーニング・ポートフォリオの本文を作成する際は、ティーチング・ポートフォリオ同様メンターの存在が必要である。ラーニング・ポートフォリオの場合は基本学生同士で作成するため、メンターは教員ではなく学生（可能であれば同学年）担当が望ましい。学生メンターを配置することにより、互いに誤字脱字等のチェックや記録の文章化をサポートする役割を果たすことができる。加えて、必修科目単位を習得した3・4年次生は履修する科目にばらつきが生じるため、学生メンターと共に他科目の概要や学習内容を理解することも可能である。

3.3 分析

ここでは、学生が作成したラーニング・ポートフォリオを対象に分析を行う。なお、本論文では履修者15名中5名の学生（学生A,B,Cは音楽文化コース、学生D,Eは演奏表現コースに所属）によって作成されたラーニング・ポートフォリオを例として挙げる。

表1は学習計画にかんする記述である。本来ラーニング・ポートフォリオ作成にあたって不要と思われるこの項目を導入した経緯として、半澤（2007）の「学業に対するリアリティショック」すなわち「入学前に抱いていた大学での学業イメージと入学後に実際に経験した学業の間のズレ」を少しでも解消することを目的としている。何のために音楽学部へ入学したのか、そして卒業後の進路について1年次の時点でどのように考えているのかを文章化することにより、大学における学習意義の再確認を行う。

ここで挙げた学生は、入学目標は明確にあるものの、音楽教員を志している学生D以外の卒業後の進路については曖昧である。これはムジカノーヴァ編集部による2001年の音大生（全国約2000人対象）アンケート調査⁹⁾においても「現在悩んでいること、迷っていること」に7割の学生が「進路や将来」と答えたことから、音楽学部を卒業してからどのような仕事に就くのか、大学入学後も先行きの見えない状況が実態として挙げられる。また、学生CおよびEのように、大学での授業を通して自身のなりたい職業を見つけていく場合もあることが分かる。ここで挙げた学生のいずれも、

表1 学習計画の例

学生 A	私が音楽学部に入學しようと思ったのは、自分の好きな音楽を生かした職業について、教師などの表に立つ仕事に就くか、音響などの裏方に回る仕事に就くかを4年間で模索しなかったからである。また、卒業時に身に付けたいことは、自己分析力と自分の伝えたいことを簡潔に分かりやすい言葉にして相手に伝える力である。
学生 B	音楽現場の裏方として支えるために音楽を本格的に勉強し、その魅力を自ら発信し伝えていきたいと考え、入学を決意した。それにしたがって卒業時に身に付けたいことは、基礎的な音楽能力、演奏会などの企画力、運営力、文章作成能力である。また将来の選択肢の一つとして音楽療法士にも興味があるため、資格取得を目指している。
学生 C	学んだことを普段の生活の中で応用することで知識を定着させ、授業の中だけで完結せずに自分の力としてどこでも発揮出来るよう作曲技術や楽曲分析技術を身に付けていきたい。(中略) また、自分はポップスに興味があり、その類の曲を分析することが好きだが、音楽史についての知識が著しく欠けているので、これから音楽を続けていく上でクラシックにも目を向けて、その歴史や基本的な知識だけでも身に付けていきたい。
学生 D	私は将来、吹奏楽の指導ができる音楽教員になりたい。演奏表現コースに新設された音楽教育専攻は、2つの副科実技を履修することができ、多くの楽器に携われることに魅力を感じ、音楽学科に入學した。卒業後は、現役合格をし、即戦力として働ける教師になりたい。そのためには、4年間で多くのことを学び、吸収し、教壇に自信をもって立てる教師を目指し、自ら考える力、プレゼンテーション力、自己管理能力を身に付けていきたい。
学生 E	中学生のとき吹奏楽部でクラリネットを始め、大きなコンクールで多くの経験を重ねてきたが、音楽の本質や意義を見失うことも多かった。しかし音楽が好きで演奏することが楽しいと感じることに変わりはなく、将来もずっと音楽に携わりたいと考えた。音楽と自分自身と向き合えるようになるために、積極的に自分で学び経験を積んで、いずれは自分が楽しむだけでなく誰かの役に立つことができれば幸せだと思う。(中略) 必要な知識を身に付け、人間としても成長していけるような大学生活を送りたい。

音楽という専門科目を学習することを目的として入学した場合がほとんどであることから、ラーニング・ポートフォリオを通じて、教員側が学生に対し将来の仕事に繋がるアプローチをすることが求められるだろう。

表2は学習内容の把握にかんする記述の例である。前述どおり、1年次に履修した科目について省察的記述をしなければならないが、高山(2000)が指摘するように、中等教育を受けてきた学生にとっての学習とは暗記をすることだという学習観を持っている傾向にあり、内容を深く理解するといった学習は生じにくいことが予測される。そのため、この項目では音楽学部の真髄である実技レッスンおよび音楽専門科目の概要を大まかに把握するとともに、音楽学部の教育目標の再確認を目的とする。

講義中、この箇所をまとめるのが難しいとの声が多く上がったものの、ここで挙げた学生のほとんどが履修した科目の概要を把握しており、省察的に記述していることが分かる。とりわけ共通して書かれていることが、常に知的好奇心を養い、基礎的知識の習得を目指すという点である。各々興味関心のある事項についての記述に加え、それを学習するために今の自分に足りていない知識や技能習得のために、どのような学習をすべきかについて考察していることが見受けられる。

表3は記録をもとに作成した自己評価にかんする記述の例である。ここでは科目を「音楽基礎講座」に限定して分析を行う。「音楽基礎講座」の講義では、アカデミック・スキルズを用いて音楽の文章術の学習や音楽文献の調査方法について学習するとともに、映像作品および実作品の分析を通

表2 学習内容の把握の例

学生 A	<p>私は、音楽を教える側と音楽を支える側のどちらの職業に就くとしても、私に関わっている人たちにより音楽を好きになってもらえるような取り組みを行いたいと考えている。それを踏まえた上で、シラバスの音楽概論に書いてあるような「パソコンやスマホを駆使し、それらを音楽学習に役立てる」という部分が私には不足していると感じた。しかし、合唱や音楽基礎講座に書いてあるような「お互いに意見を尊重し、仲間とともに協調して取り組む」という点においては出来たことから、周りの意見を聞くことで自分の視野や価値観がより広がったのではないかと感じている。これらのことから、次年度では良かった点をさらに良くしていき、不足している点については、SNSや電子機器を音楽の良さを広めていく方法としてどう活用していけば良いのか模索していきたいと思う。</p>
学生 B	<p>合唱の到達目標より「合唱を通して、演奏会を企画・運営するための知識や理解を深めるための演奏機会に参加することができる」の部分から、裏方として支えるために出演する側にも立ち、運営について多角的に考える力を養うことができると考える。次に音楽基礎講座の到達目標より「大学生として必要な文章の書き方、発表方法を身に付ける」という部分から、レポートを通して音楽を文章で表現することができるようになると思う。そして音楽学部の教育目標より「地域の文化の発展と、人々が生涯にわたって豊かな精神を育むことを支援する力を育てる」の部分から、演奏会スタッフや音楽療法士として活動するための心構えを持つことができると考える。</p>
学生 C	<p>音楽への理解を基本知識や基礎技術を学ぶことにより作品を読み解く力や教育者として必要な指導法、音楽学習での応用をできるようになることである。履修している科目の到達目標が、自分の目標を達成するのに繋がるものや一致するものが多い。しかし、経験という面では自分が所属している音楽文化コースでは演奏表現コースに比べると少なく、時間が足りていないと感じるので、自主的に学び、経験をしに行く必要があると考える。時間の確保や効率よく技術を向上させる方法を自分で考えていくのが初めに解決すべき課題でもあることに気づいた。</p>
学生 D	<p>私は、色々な楽器に触れ、理論や音楽史、ピアノや声楽、管楽器の実技を深く、幅広い知識を身に付け、演奏技術向上を目指したい。(中略)1年次に履修した科目の到達目標は、基礎的知識を身に付けることが共通している。基礎的知識を学ぶことで深く幅広く音楽を学んでいけると思う。まずはどの科目も基礎力を身に付け、基礎から深く学んでいきたいと考えている。</p>
学生 E	<p>教育現場で必要な声楽、ピアノ、理論、ソルフェージュの基礎を学ぶ。各授業でクラス授業形式の集団型と個人レッスン型に分けられる。集団型ではお互いにコミュニケーションをとり他社の演奏表現に対する多様性や協調性を学ぶ。個人レッスン型では個人のレベルに合わせた丁寧な指導が行われ、技術向上を図る。また、音楽基礎講座など座学の授業では、音楽を多角的にみる視点を養うため、音楽を学ぶ者にとっての常識的知識の習得に向けた授業が行われた。</p>

じて、様々な視点から音楽を覗くことを行なった。

学生 A および C は記録をもとに省察しており、自身に足りていない知識や学習の見直しにかんする記述が窺える一方、学生 B、D および E は講義中に学んだことをまとめた後、自身が学んだことについて記述していることが見受けられる。ラーニング・ポートフォリオの場合、学習内容の把握に加え、学生自身が学習プロセスに対して省察を加える必要があるため、適宜学生メンターによるサポートが必要であると考えられる。また、「音楽基礎講座」の根拠資料にはリアクションペーパー

表3 「音楽基礎講座」の自己評価例

学生 A	音楽学部で学ぶ上での必要な基礎知識や技能、意欲や関心、態度を身に付けることを目的に学習した。私は将来像が未だに漠然としているからこそ、どの道に進んでもいいように音楽に関する知識をより深く学ばなければいけないのだが、自分が今何を優先的に習得すべきかの吟味が出来ず、全て中途半端に自分の知識として取り込んでいるのが現状であると感じている。そのため2年次では、自分が今何をすべきかということを見極めながら、音楽学部で学ぶ上での必要なことを一つずつ着実に習得していきたいと思う。
学生 B	音楽学科として学生生活を送るために必要なレポートの書き方、データベースの利用方法などを、アカデミック・スキルズを用いて学んだ。前期では音楽研究レポートと前期リサイタルのレポート、後期では演奏会レポートとラーニング・ポートフォリオを書き、文章作成力を養った。また、様々な楽器や演奏形態のリサイタル・映像作品を鑑賞することで、これまで触れてこなかった音楽について幅を広げることができた。
学生 C	この科目では、音楽だけに限らず授業での効果的な学び方や計画の立て方など、すべてに共通する大学生活の基礎部分について幅広く学ぶことができた。科目ごとにノートを作ることを推奨されて作ってはみたものの、うまく活用することが出来なかった。その要因としては、先生が話す内容の最も重要な部分やメモすべき部分とそうではない部分を聞きながら判断して書くということを経験せずに、全てを記そうとして大事な部分を聞き逃してしまい、途中で諦めてしまったことが挙げられる。必要最低限のポイントに絞ってノートを取り、授業で見た映像の詳細については自分で復習して知識を補うことで、一つ一つの授業で得るものをより多くし、より濃く学ぶことが今後の課題である。
学生 D	演奏会企画方法やリサイタル鑑賞、レポートの書き方など、音楽に関することを深く学んだ。講義では、わからない人（演奏家・作曲家など）や音楽に関する単語をすぐに調べよう努めたが、調べてもすぐに忘れてしまうことが多い。忘れる前に何度も復習し、音楽を幅広く学んでいきたいと思う。また4年間の中で演奏会企画を行い、演奏する場を自分で設けてみたい。
学生 E	世界史、楽譜、舞台、絵画、文学など、西洋音楽は一つの側面だけでなく多角的にみることができるということを学んだ。（中略）芸術家は他人の作品に影響を受け発見をすることで自身の解釈、表現および知識の引き出しを増やすことができるのだと思った。私も文学や絵画に影響を受け、色彩感や文章を音で表現できるような音楽家になりたいと思った。講義では、自分が知らなかったことや授業の中で疑問に思ったことはその場ですぐ調べるよう意識した。まだ経験も知識も乏しく、音楽を多角的にみる視点を養うことはできていない。楽譜の解釈はもちろん、演奏表現から鑑賞の際、今までとは違った発見ができるよう教養を身に付けていきたい。

を添付している学生がほとんどであったが、記述を裏づける根拠資料を添付する必要があるため、何を綴るのかについて慎重に検討しなければならない。

4. 考察

音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオおよびラーニング・ポートフォリオの開発に際し、以下の2点が明らかとなった。

- 1) ラーニング・ポートフォリオを通じて音楽学部での学習目標を明確にすることで、4年間の学

習計画を立てやすくなることが期待される。さらに、1年ごとに記録を更新することにより、1年間の学習成果を把握することができる。

- 2) ラーニング・ポートフォリオでは科目ごとのフィードバックを行うため、教員の授業改善（すなわちティーチング・ポートフォリオの活用）につながることを期待される。また、学生の履修状況を把握することができる。

1) について、元より講義を受講するだけでなく、自己省察を行うことで自身に足りていない知識の再認識を行い、4年間の学習計画を再構築することが可能である。ここでは1年間の学習成果の把握とりわけ実技科目における技能習得に際し効果的であると考えられる。また、根拠資料として実技レッスンで学習している曲の楽譜を提出した学生DおよびEを対象に2022年4月と2023年2月の楽譜比較を行った際、2月に提出した楽譜の書き込みが入学時よりも細かくなっている点、専門用語の把握および楽曲分析能力が向上している点等見受けられたことから、引き続き記録の更新を行うことが推奨される。

2) について、基本教員は自身の研究分野にかんする講義のみを受け持っているが、ラーニング・ポートフォリオを通じて他の教員がどのような講義を行なっているのかについて知ることができる。これにより、自身の授業内容を見直し、他教員の指導法を学ぶことにより授業改善へ繋がるのが可能となる。例えば、「ソルフェージュ」の授業では非和声音や和音の解説、音楽史の復習から楽曲分析まで行うが、当該学生がどの範囲まで学習しているのかを把握するため、「音楽理論」および「音楽史」の授業にかんするラーニング・ポートフォリオの記述内容および根拠資料を参考にすることで、より学生に寄り添った授業を行うことが期待される。また、学生の記録を把握することにより、教員の教育方針と一致しているかの再確認を行うことができる。仮に教員が教授しようとしていた内容と学生の学習記録が一致していない場合、授業内容の改善が必須となる。その際、ティーチング・ポートフォリオを見直し、ラーニング・ポートフォリオを手がかりにすることで授業改善へ繋げることができるのではないかと考えられる。

5. おわりに

本稿では、音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオおよびラーニング・ポートフォリオの開発を行い、今後の教育改善および教育業績評価へと繋がる可能性について明らかにした。ティーチング・ポートフォリオの作成にあたっては、従来の作成手引きに加え、教員の演奏活動記録や学生の実技レッスン成果についての記述および演奏家としての根拠資料を添える提案（演奏活動＝教育活動）を行った。ラーニング・ポートフォリオの作成にあたっては、6つのステップに分け、履修した科目について省察的記述でまとめるとともに、根拠資料としてレッスンで使用した楽譜やプログラムを綴じることで、音楽専門科目の学習を裏づけることが可能であることを提案した。

今回は音楽学部におけるティーチング・ポートフォリオおよびラーニング・ポートフォリオの開発に留まったが、今後は授業および学習改善に向け、より具体的なポートフォリオ本文の構成について検討する必要があると考える。

【注】

- 1) 筆者による調査。2022年10月から12月にかけて音楽学部生を対象にアンケートを行った。
- 2) ピーター・セルディン（2007）『大学教育を変える教育業績記録—ティーチング・ポートフォリオ作成の手引—』大学評価・学位授与機構監訳、栗田佳代子訳、玉川大学出版部、p. 3.
- 3) 「アメリカ直輸入型ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップは3泊4日だが、これを

もとに2泊3日の日本型ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップが開発され、2008年8月に大学評価・学位授与機構において日本で初めて実施された。」皆本晃弥(2016)「ティーチング・ポートフォリオによる教育業績評価」『医学教育』第47巻第2号, pp. 90-91.

- 4) 東京藝術大学 HP 参照。 <https://www.geidai.ac.jp/information/prize/teacher> (閲覧日: 2023年2月27日)
- 5) とりわけ「総合的な学習の時間」の評価としてクローズアップされた(杉野 2015: 97)。
- 6) 「学生が、学習過程ならびに各種の学習成果(例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など)を長期にわたって収集したもの」と定義した。
- 7) 2023年1月11(木) 授業動画参照。 <https://youtu.be/sWDH3UUWw0E> (閲覧日: 2023年2月27日)
- 8) 本学の場合、演奏者自身による曲目解説・研究ノートが書かれてある秋期演奏会(3年・演奏表現コース)および前期リサイタル(4年・演奏表現コース)のプログラムを対象とする。学外公演の場合も同様である。
- 9) ローランド芸術文化振興財団によるアンケート調査。実施期間を2000年6月から10月とし、国公立大学音楽学部および私立音楽大学・短期大学を対象とした。

【引用・参考文献】

- Seldin, Peter. (1993). *Successful Use of Teaching Portfolios: Massachusetts*: Anker Publishing Company.
- セルディン, ピーター. (2007)『大学教育を変える教育業績記録ーティーチング・ポートフォリオ作成の手引ー』大学評価・学位授与機構監訳, 栗田佳代子訳, 玉川大学出版部.
- 木内敦詞 (2021)「ティーチング・ポートフォリオ・チャートの大学体育への適用:教職歴30年の大学教員の事例報告」『大学体育研究』第43巻, pp. 137-144.
- 栗田佳代子 (2020)「大学教員の教育業績評価の方法としてのティーチング・ポートフォリオ」『大学評価研究』第19号, pp. 55-63.
- 栗田佳代子 (2021)「ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ資料」インターネット, <https://kayokokurita.info/post-319.html> (閲覧日: 2023年2月24日)
- 栗田佳代子・吉田墨 (2021)『リフレクションを可視化する ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成講座』医学書院.
- 杉野竜美 (2015)「大学生の留学支援におけるラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」『大学教育研究』(神戸大学・大学教育推進機構)第23号, pp. 95-110.
- 杉本均 (1997)「アメリカの大学におけるティーチング・ポートフォリオ活用の動向」『京都大学高等教育叢書』第2号, pp. 14-30.
- 高山草二 (2000)「大学生の学習観の特徴と構造」『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)』第34巻, pp. 1-10.
- 土持ゲーリー法一 (2006)「ティーチング・ポートフォリオの積極的導入 自己反省から授業改善へ」『21世紀教育フォーラム』第1号, pp. 1-12.
- 土持ゲーリー法一 (2007)『ティーチング・ポートフォリオー授業改善の秘訣』東信堂.
- 土持ゲーリー法一 (2009a)『ラーニング・ポートフォリオー授業改善の秘訣』東信堂.
- 土持ゲーリー法一 (2009b)「ティーチング・ポートフォリオとラーニング・ポートフォリオの可能性」『21世紀教育フォーラム』第4号, pp. 1-10.
- 半澤礼之 (2007)「大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成」『キャリア教育研究』第25巻第1号, pp. 15-24.

- 中川洋子 (2015) 「大学英語教育におけるラーニング・ポートフォリオの実践」『駿河台大学論叢』第 51 号, pp. 63-71.
- 皆本晃弥 (2016) 「ティーチング・ポートフォリオによる教育業績評価」『医学教育』第 47 巻第 2 号, pp. 89-96.
- 三宅元子・白井靖敏・安井健 (2018) 「学修ポートフォリオ二年目の比較検討」『名古屋女子大学紀要』第 64 号, pp. 409-417.
- 山口亮介 (2021) 「音楽実践演習における e ポートフォリオの活用についての考察－教員養成段階での模擬授業の省察による授業の有効性と課題－」『盛岡大学紀要』第 38 号, pp. 81-89.